

## 編集後記

日本消化器外科学会雑誌の編集委員を担当させていただくようになってから5年が経過した。1か月に8～10編の論文の査読を行ってきた印象では、論文のレベルは私が査読を始めたところと比較してある程度向上はしたが、現在のところやや足踏み状態ではないかと思われる。近年、日本の臨床領域における医学研究が国際的な評価を受ける必要性が認識され、本邦における医学論文が英文で発表される機会が急速に多くなってきている。このような傾向の渦中であって、邦文誌の在り方、位置づけが特に最近問題とされてきている。一般的には内容が良質な論文は英文で報告される傾向があり、個人の業績としてより impact factor の高い英文誌に投稿し採用されることを目指す傾向がある。

一方、日本での医学研究の発展には独自のメディアが必要とされることも事実である。国内学会や邦文誌があっても本邦における医学研究の基本的発展があるということは現在に至る過程を振り返ってみても明らかであろう。このように考えると日本においては、海外での学会や英文論文で国際的に発表することと、国内学会や邦文誌における発表とを両立させていく必要があると私は考えている。このような観点から、日本消化器病学会誌は邦文誌として現在まで重要な役割を果たしてきており、その役割は将来的にも変わりはないであろうと考えられる。

本誌に投稿されてくる論文には様々な内容的質と出来ばえのものがある。査読の結果、論文として成り立たせるためにはかなり大がかりな加筆や訂正を必要とするものも多い。内容的に新たな知見をもつものや読者に対して何らかの意義のある論文であればなるべく採用の方向で考え、我々編集委員が教育的なことも考慮して良質の論文になるように細かく指摘点を書き添えて著者に返送している。その結果、良質の論文に修正されて再投稿されてくるものも多く、特にこのような修正論文を読んだ時には編集委員としてのやりがいを感じる。

本誌への論文の投稿を通じて、特に若い外科医がさらにより良い論文を執筆するように努力し、本誌の今後の発展に寄与していただけると幸いである。

(小西文雄)